
この恋の行方

鹿の子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この恋の行方

【Nコード】

N2008T

【作者名】

鹿の子

【あらすじ】

義姉弟を中心に、それぞれの恋の行方を描いています。

気がついたら、好きだった。

ただ、それだけのこと。

（「雨傘」より）

悲恋ですので、くれぐれもご注意ください。

「こ近所恋愛のすすめ」より独立。

サイトより転載

麦茶

軒下に吊つてあるサークルに洗濯物を干し終わった途端、部屋のベルが鳴った。

窓ガラスを急いで閉めて、そのまま玄関に向かった。

木の薄いドアを開けると、そこには目線が同じになってきた弟が紙袋を持って立っていた。

「おす」

弟が挨拶をしてくる。

「おつす、たーさん。まあ、まあ、入りなせーな」

私がそう言くと弟は「おじゃまします」と言つて、体の割にはでかいスニーカーを脱いで部屋の中に入ってきた。

私も弟も、百七十センチはあつて。

だから、二人がいるとこの小さな部屋がますます小さく狭くなつた気がした。

ここは、春から私のお城になったアパートの一室で、そしてこのお城は弟が住む私の実家から歩いて5分の徒歩圏内にあった。

「これ、母さんからの差し入れ」

弟が差し出した紙袋はずしりと重く、そしてこの中にはいつものごとくいくつかのタッパーに美味しいおかずがうんと入っているのだ。

「すごいなあ」

私は受け取った紙袋をキッチンとは名ばかりの場所へと運んだ。

弟が壁を背中に、ゆっくりと座るのが見えた。

その前には小さなテーブルがあつた。

「麦茶、飲む？」

弟に聞く。

「うん。飲む」

弟が答える。

コップを二つ出して、冷凍庫から出した氷を入れる。

そして、冷蔵庫に入っている麦茶を出して、それに注いだ。

透明感のある茶色の液体が、氷をゆっくりと持ち上げていく。

両手にコップを持ち、弟の前にあるテーブルへと置いた。

置いた瞬間にもまた氷はゆっくりと動いた。

「冷たそう」

弟が言う。

「冷たいよ」

私が言う。

弟は麦茶が好きだった。

だから家では一年中麦茶が冷蔵庫に入っていた。

私にこの弟ができてから、私の中では麦茶は夏の季語ではなくなってしまった。

そして私も、こうして麦茶を一年中飲む女になってしまったのだ。

「あ、紙袋の中に文化祭の写真を入れてきたんだった」

麦茶のコップを手を持ったまま弟が言った。

「そうなんだ。持ってくるよ」

そう言っただけで私は弟から渡された紙袋の中を見にいった。

背中から、からんからんという氷の音が聞こえた。

弟が麦茶を飲む音だ。

一人暮らしを始めてから、一番懐かしいと思う音がこれだった。

からん からん

弟が麦茶を飲む音。

弟が。

紙袋の中には、弟が言ったとおりに写真が無造作に突っ込んであった。

それを全部取り出して、写真を見ながら弟がいる場所へと戻る。

「相変わらず無法地帯のような学校だね」

くすくすと笑いながら弟から少し離れた場所へと座る。

「そうかな？ もう、その状態に慣れてて麻痺しているのかも」

弟もそう言いながら笑う。

弟の学校は秋でなく春に文化祭がある。

私も何度かお母さんと一緒に行ったことがあるけれど、あの学校に行くとは毎回身の置き所がないような気分になったものだ。

お母さんもそれは同じようで「沙穂ちゃんが一緒にほんと助かったわ」と言っていた。

その頃も父は仕事が忙しくて、なかなか家族で何かするってことができない状態だったのだ。

何枚か写真を見ていくうちに弟の親友くんが写っていた。

「あ、神山くんだ。またすごい髪の色しちゃって」

神山君は会ったたびに髪の色や髪型が変わっていたのだけれど、今回は髪の色は灰色だった。

しかも長いもんだから、下手すると山姥にも見えた。

「それ、染めるの俺も手伝ったんだ」

「へえ、男の友情だね」

自分の髪はいつも真っ黒なのに、そんな弟が友だちの髪を染める

のを手伝ったなんて、考えただけでも微笑ましいというか、可笑しかった。

「神山が、今年は来ないんだねって言うてた」

「え？ それって私のこと？」

えへへと笑いながらその話題をするりと抜けようと、また次の写真を見た。

そこには、文化祭で使う資材をあれこれと運んでいる弟の姿が映っていた。

「縁の下の力持ちだ。たーさんは」

そう言ってその写真を弟の方にはつと向けた。

弟が静かに笑った。

そんな弟の様子を見て、私がこうして一人で暮らし始めたのは大正解だったと思った。

もう、弟だなんて言えないくらい、たーさんは大人になっていたから。

「沙穂。付き合って」

弟がまっすぐに私を見て言うてきた。

「たーさんが、大学に入ったら考える」

「沙穂は前、『高校になったら』って言った」

弟が間髪いれずにそう言った。

「だって、私は嘘つきだもん」

私が答える。

「分かった。大学だな。俺が大学に入ったら考えるんだな」

弟が念を押すかのような口調でそう言った。

「うん。国立大学ストレートで入ったらね」

私がそう言くと弟は苦笑した。

「沙穂は」

弟はそう言っただけ言葉は切った。

私はその先の言葉を聞くのが怖くて、ただただテーブルの上に置いた麦茶のコップを命綱のように両手で握っていた。

「なんでもない」

弟はそう言っていると、麦茶を一気に飲み干した。

さつきよりも乱暴に氷がぶつかる音が聞こえた。

からん からん からん

小さなテーブルの上には、氷しか残っていないコップとまだ一口も麦茶が減っていないコップがあった。

それはまるで、二人の覚悟の違いをも表しているみたいで。

ためらい、とまどい。

そんなものがうんと詰まった私みたいに、私のコップには麦茶がいっぱいいっぱい入っていた。

「帰るよ」

そう言つと弟は立ち上がり、そしてすたすたと玄関に向かって歩き出した。

弟がスニーカーを履いた。

「父さんも母さんも沙穂のこと気にしているから。事務所開いて家が狭くなったから沙穂が出て行つたと思つているから」

顔だけ少し角度を変えてこつちを見ながら弟がそう言った。

「それ、ほんとうのことだもん」

それをチャンスとばかりに一人暮らしを言い出して始めたのは、ある面から見たらほんとのこと。

「嘘つき沙穂」

弟が私を見ないでそう言った。

そうだ。

私は嘘つきだ。

そしてその嘘を、弟と私は共有している。

「お母さんにお礼を言っておいてね」

弟の背中に声を掛ける。

「そんなことは、自分で電話しなさい」

弟が振り向きざまにそう言って笑った。

その笑顔に負けないくらいこっちも笑った。

笑いたくもないのに、笑った。

扉が閉まる。

その瞬間、私の顔から笑いが消えた。

何の表情もなくなっていくのがわかる。

隣り合う部屋から、徒歩五分の場所へ。

そして、徒歩五分の場所からもっと遠くへ。

十歳の時にできた一つ下の弟を好きになってから、私は彼から逃げることはかりを考えている。

こんなに近くで、恋を見つけたくなんなかった。

こんなに切なくて、強い想いなんて見つけたくなかった。

いくら血は繋がっていなくても、やっぱり弟は弟で。

常識と人の目を気にしてしまう私には、「弟」との恋愛は受け入れられないものだった。

早く逃げなきゃ。

もっと、もっと、もっと遠くに。

しばらく私はそのまま玄関に立つたままだったのだろう。

振り向いた私の目に映ったのは、麦茶のコップの中で解けて小さくなった氷が情けなさそうに浮かんでいる、そんな姿だった。

アッシュ　グレイ

つんとした臭いが鼻をつく。

その臭いに小さく咳き込む。

乾いていた髪が、段々とそのつんとした臭いとともに湿っていく。

地肌にその液体がつき、ひやっとする。

気持ちが悪い。

目の前の姿見には、やってもらっているのに「早く終わらないかな」なんて思いを顔に出しながら椅子に座っている俺と、透明なビニールの手袋を嵌め黙々と作業をしてくれている同級生の森谷もりや匠たすくの姿が映っていた。

一体何をきっかけに、森谷が俺の髪を染めるのを手伝うようになったのか。

そんなことは忘れてしまったのだけど、「あゝ、そろそろ髪の色を変えてえ」と俺が言っていると、森谷は「いつでもいいよ」と言ってくれる。

髪の色だけじゃなくて「あゝ、ちょっとこれどうにかした方がいいべえ」と俺が言っていると、「そうだね。じゃ、どうしようか」と森谷は言ってくれる。

まあ、がたいもビジュアル的にも俺のほうが目立つので、たいてい俺が壇上に立ったりマイクを握ったりしていかにもリーダー面をしちゃっているわけだけど、知る人ぞ知る影の実権を握るのは森谷匠だったりするのだ。

縁の下の力持ちと言えば聞こえはいいが、そんなもんじゃない。

知能犯。

確信犯。

森谷　匠だけは、敵にまわしたくない男だった。

まあ、そんなこと言うと、いかにもずる賢そうな雰囲気のヤツだ
と思うだろうけれど、こんな少年少年したヤツは同じ学年を見渡し
てもそうはいない。

身長だって、百七十あるかないかだし、体も華奢なつくりをして
いる。

俺と並ぶと弁慶と義経だって、そんなことも言われるくらいだ。
たまに口が悪い奴等は、「おまえら、デキテルの？」なんてこと
を言ってきたりもする。

まあ、つまりが、仲がいいってことなんだと思う。

「なあ。今年は文化祭に姉ちゃん来るの？」
森谷に聞く。

一週間後には、うちの学校の文化祭がある。
その文化祭に、中三まではこいつの母ちゃんと姉ちゃんが揃って
やって来ていたから。

「さあ、どうかな」

すすす、と森谷が髪をパーツに分けて、今度はそこを染め出した。
その返事で、ああやっぱり今年も来ないんだな、なんて思った。
なんとなく。

「あのさ。森谷、おまえさ」

「まつつあん、入るよ」

その声とともに、トレイを持つ四十万しじま 裕香ゆうかが鏡の中に映った。
「おまえ、今、フライングだったろ」

入るよ、なんて声よりも先に、裕香の体はこの部屋に入っている
のをコンマ何秒かのことだけれど俺は見たから。

「いやあ、まつつあん。視力いいねえ」

そう言いながら裕香はトレイを床の上に置き、部屋の隅に畳んで

立てかけてあった折り畳みの椅子を持ってきて広げて座った。

「こんにちは、森谷君」

裕香が言う。

「こんにちは」

森谷も言う。

「なんだ、その優等生な挨拶はよあ」

くそ気味悪い、なんて思いながら俺はそう言った。

「松三は口が悪いなあ」

裕香はいつもは『まっつあん』って俺を呼ぶくせに、お説教じみたことを言う時は必ず『松三』と呼ぶ。

それは、今は亡き俺の母ちゃんの癖なんだけど、それを裕香は継承しているのだ。

誰の許可もなく。

「ほら、ジュースとお菓子。まっつあんのことだから何も出していないと思ってさ」

確かに用意なんてしていなかった。

が、しかし。

そもそも男は、今日裕香が用意したようなアセロラのジュースだの（あいつは今これに凝っている）クッキーだのワッフルだの（つまり粉から出来た甘いもん）そんなもんは、飲んだり食ったりなぞしないのだ。

まあ、嫌いつて訳ではないが。

「今度は何色なの？」

裕香が俺じゃなくて、森谷に聞く。

「箱には、アッシュグレイって書いてあったよ」

森谷が答える。

「ふーん。なんだそりゃ」

裕香が言う。

「アッシュなグレイだよ。ぼんくら共学生」

裕香に言う。

裕香は中学の時から男女共学の学校に通っている。

俺は中学から男子校。

同じ小学校に行って、塾も同じだったけれど、その先の進路は大きく違っていた。

「そんなの意味はわかるけれど、そういうことじゃなくて、『なんでそんな色に染めるの』って意味よ」

裕香が言う。

「ふふ。このそこはかたなく混沌とした色の味わいは、おまえさんには分かるまい。おまえんとこの軟弱な男どもで、そんな髪の色のはずかしいだろうからな」

俺がそう言うのと裕香の顔が曇った。

「ふん。混沌としているのは、松三の脳みそでしょ。それにそういえばその色、どっかで見たことがあるのを思い出しちゃったもんね。この、屁理屈大魔王がっ」

そう言うのと、フーンとした顔で裕香はかがんでコップを取り、ジュースを飲みだした。

薄ピンク色した液体が、裕香の細い喉を通っていく様子が鏡に映る。

裕香の喉がごくごく動くのが見える。

そんなのを見ると、ついこっちまで唾を飲み込みそうになってしまふ。

やばい。

森谷だっているんだし。

いや、いなくなつて、こんな反応はまずいだろう。

まずい。

まずい。

ただでさえ、裕香の家とうちの親父で、俺たちをどうにかしようなんて話が出ているっていうのに。

そんなところに、もし、俺が裕香に手を出したなんてことがあったのなら。

明日にでも役所に向かうはめになってしまう。

確かに、裕香は結構いいやつだってことは分かっている。

前向きだし、明るいし。

何よりも、心がまっすぐで裏がない。

あんなんじゃ、これからの人生騙されてばかりだろうなあ、なんてヒトゴトながらそう思う。

俺が、中学・高校と女の子と付き合っても、どうもしっくりこないのはどこか頭の隅に裕香がいたからだと思うし。

多分、俺は裕香が好きなんだと思う。

……多分。

しかし、まだ早い。

だから、まずいのだ。

非常に。

ここ最近、親父の再婚なんて話もちろはら出ている。

親父としては、どうも自分だけ幸せになるのは申し訳ないって思っ
って、俺にも誰かいたほうがいいなんて思っているみたいだけれど。

兄貴たちが独立して家を出てしまったので、この家は俺と親父の二人だったから。

余計に、そう思っただろうけれど。

もし、裕香と付き合いでもしたら。

十ヶ月後には俺は『親父』になっているかもしれない。

何もしないで済ませるほど、俺は大人じゃない。

愛情とかそんなこと抜きにして、あいつがシユースを飲んでいるのを見ただけでやばいんだから。

それが自分でも怖いくらいわかっているからこそ、近づきたくないし、近づいてきて欲しくもない。

俺だって、裕香だって、まだまだ勉強したいことってたくさんあるわけだし。

だから、まずいのだ。

「おまえ、とつとと自分の家に帰れ」

裕香に言う。

「そんな頭して、威張っちゃって」

確かに、俺の頭は今「途中経過」でちっともカッコ良くはない。

「いちいちうるさいな」

裕香に言う。

裕香はすつと肩をすくめる仕草をした。

「ねえ、文化祭のことだけど」

裕香が森谷に向かってそう言った。

「うん。来られそう？」

森谷が言う。

「そうなの、クラブの予定がずれたから友だちを連れて三人で行こうと」

「来ても入ることはできないぜ」

は？　って顔で、鏡の中の森谷と裕香が俺を見る。
俺は、こほんと咳をひとつする。

「今年からうちはチケット制になったのさ。そしてもうチケットは配布済みなのだよ。残念だねえ」裕香くん」

ほほほほ、と笑いながら裕香を見る。

「松三。チケットなら既に貰っていたけれど。森谷君から」
裕香が眉間に皺を寄せて俺を見ている。

「松三。あんた、このアタシを締め出そうとしたわね」
そして、そのままの顔で森谷の方にも視線を移した。

「で、森谷君、あなたこれを松三からって私に嘘をついたわね」
裕香は俺たち二人をぎろりと見ると、ポケットをからごそそと
チケットを取り出した。

アッシュグレイな色をした三枚の細長いチケット。

それを椅子から立ち上がった裕香はびりびりと破きだした。

アッシュグレイの紙がひらひらと床に落ちていく。

破られたのは紙なのに。

落ちていくのも紙なのに。

見ていると心が痛くなった。

「ばか」

破いたチケットを撒き散らしたまま、裕香は部屋から出て行った。

さっきの裕香のように、俺はすっと肩をすくめる仕草をした。
それを見た森谷が「ごめん」と言いながら再び俺の髪を染め出し

た。

「おまえが謝るなよ」

つんとした臭いにむせるふりをしながら、ごほごほと俺は咳き込んだ。

そうそう、これでいいのさ。

これで裕香もうちには来ないようになるかもしれないし、それは願ったり叶ったりのことだから。

俺だってまだまだやりたいことがたくさんあつて。
裕香だけにしられるなんて、今はごめんだから。

でも。

今、突き放した人を、自分の都合がよくなったからといって、引き寄せることが出来るんだろうか？

「俺、しくじったかな」

鏡に映る森谷に聞く。

「しくじったというか」

そう言ったあと森谷は「はい、終了」と言っただ道具を片付け出し、そしてぽつりと「贅沢」と言った。

「贅沢？」

森谷に聞き返す。

「うん。神山は、贅沢だな」

そう言つと森谷「洗面所を借りるよ」といい部屋から出て行った。

確信はないけれど、森谷は自分の姉ちゃん（って言っても義理らしいが）のことを、好きなんだろうなあと俺は思っている。

森谷は何も言わないけれど、なんとなく。なんとなくだけ。

自分の姉ちゃんを好きだなんて。

複雑だ。

「贅沢かあ」

贅沢かあ。

贅沢かな。

……贅沢かもしれない。

でも、それでも、だからといって。

「ああ、面倒くせえ」

床にちらばったチケットの残骸を拾いだす。

破れたチケット。

でもその裏にはそれを破いた人の心がある。

机の上に置いてある小さなプラスチックボックスの空の引き出しを取り出して、拾ったそれを全て入れた。

そしてその箱をセロハンテープの側に置いた。

つんとした臭いが鼻をついた。
小さく咳き込む。

かがんで手にとり飲んだアセロラのジュースが、少しだけ喉に
みた。

合図

「森谷さん」と呼ばれ振り向くと、頬に冷たい缶が当てられた。

「岩田さんから、森谷さんに渡してくれって頼まれて」

私の頬に当てた缶のドリンクを、辰巳君たつみがそのままテーブルの上に載せた。

「ありがとう」と私が言うと、「どういたしまして」と辰巳君は言い、そのまま四つあるイスの一つに座った。

「岩田さん、国山とちよつと話をしてから来るみたいだよ」

「あ、そうなんだ」

最近、イワが国山君と仲がいいのは知っていた。

私もイワも国山君もそして辰巳君も、高校の時に同じ塾に通っていて同じ大学に入った仲間で、学部はそれぞれ違うのだけれど顔を合わせればこうして一緒にお茶を飲んだりするような仲になっていた。

「まあ、いい加減あの二人もまとまるでしょ」

思ったよりも時間がかかったよなあ、辰巳君はそう言うと、頬杖をついた。

「せっかく一緒にキャンパスにいるんだから、今のうちに楽しまないとね」

うちの大学は、最初の二年間は学部に関係なく同じキャンパスで、三年からはそれぞれの学部によってキャンパスが変わるのだ。

私とイワは学部は違うけれど三年生になっても同じキャンパスに、辰巳君と国山君はそれぞれ違うキャンパスに行くことになる。

キャンパスが変わることで別れるカップルも多いというのは、有名な話だ。

「森谷さんもね」

そう言うとき辰巳君はテーブルに載ったままの缶をゆっくりと自分の方に向けた。

「『茨城県産 六条大麦使用』だって。森谷さんってさ、一年中麦茶を飲んでいるよね」

まあ、俺も好きだけどさ、麦茶。

そう言うとき、辰巳君は思わせぶりな視線を私に送ってきた。

「付き合う、って。はあ？」

イワの可愛い眼鏡が漫画のようにズリツと下がった。

「ええと、付き合うのは、私とクニちゃんだよ？」

下がった眼鏡を上げながらイワが眉間に皺を寄せて言った。

「うん、そのご報告はちゃんと聞いていましたってば。だから、イワたちだけでなく、私たちも付き合うことになったの」

私たちという言葉を使うことで、私と辰巳君という意味を強調してみた。

「『私たち』って。今の今まで二人の間には何も無かったじゃない？」

そうだよな、と同意を求めるようにイワは国山君のことを見上げた。

国山君は困った顔をして首筋を摩ると、辰巳君の方を見た。

「あゝ、本気？」

国山君が辰巳君に聞く。

「うん」

辰巳君が楽しそうに返事をする。

「と、本人が言っているのです」

国山君が恐る恐るイワのを見た。

「そんなの、全然納得できない！」

イワはそう言つと辰巳君に「じゃ、森谷ちゃんの好きなところ言つて」と迫つた。

「ひえ〜」と言う国山君の小さな叫び声をバツクに辰巳君が「そんなことでいいなら」と言つた。

イワの更なる睨みで、国山君が慌てて自分の口を手で塞いだ。

「キスしても首が痛くならないところ」

さらりと辰巳君がそう言つた。

そのさらりとした言い方に、私をはじめイワも国山君も一瞬「へえ〜」なんて相槌を打ちそうになった。

が。

「キ……」

え、私、辰巳君とそんなことしたっけ？ と、考えた瞬間「なにそれ！ そんなことあつたつて、聞いてないよ！」とイワの大声が響き渡つた。

その声に、周りの人たちが驚いた様子で私たちのことを見だした。

「まあ、イワ。落ち着いてよ」と、国山君がイワを宥め始めた。

「ふつー、そんなことまで言わないでしょ。ねっ」と、辰巳君が私を見て微笑んだ。

ここは、辰巳君に従うのが一番と、逆毛を立てているイワを意識しつつ私も曖昧な笑顔で「そういうことで」と調子をあわせた。

「さっきの、岩田さん。面白かったね」

帰りの電車に並んで立ちながら辰巳君が言った。

「イワって熱い女だから」

でも、そもそも私たちの話の全てが嘘なんだから、イワの反応は正しいといえは正しいのだし。

「熱いか。確かにそうだな」

そう言う辰巳君は、小さく笑った。

「話はあるけど。森谷さんって、身長、百七十はあるよね」

「うん。下手すると、まだ伸びているかも」

「うわあ。成長ホルモン出まくりだね」

「出まくり、って。まあ、そうね。いいんだか、悪いんだか」

そう答えながら、ふつと頭の中に弟のことが浮んだ。

「そのうち、俺のことも越されたりして」

「辰巳君って、どれくらい？」

「ん。四か五かなあ」

実は俺も毎年微妙にミリ単位で伸びているんだよね、と辰巳君が言った。

「森谷さんってさ、男の身長にこだわるほう？」

「あ……、どうかなあ。特にそういうことはないけれど」

また、弟の顔が浮ぶ。

「俺は気にしないから、どんどんホルモン出して伸びていいから」

「ホルモン、って」

さっきからホルモンホルモンって焼肉屋さんみたいだと、笑ってしまう。

以前から、こうした辰巳君の表現のちょっとしたところが、私のツボにきていて、楽しいと感じていた。

だから、いいと思った。

どんな理由からでも、付き合ってもいいって。

「あのさ。家まで送ってもいい？」

急に辰巳君が真面目な顔になってそう聞いてきた。

そういう展開になるんだってことは、共犯して「付き合う」って言った時から薄々は感じていた。

「うん。ちょっと駅から歩くけどいいかな」

私がそう言つと「歩くの好きだから、全然平気」と辰巳君が笑つた。

アパートの鍵を開けたら、辰巳君に手首をひっぱられて、二人してそのままの勢いでアパートの中に入った。

ドアから外れたばかりの鍵を握り締めたままの状態で、私は背中をそのドアに押し付けられた。

辰巳君の手が、頬から髪の中にずりつと動く感触を感じつつ、その唇も受け止めた。

辰巳君とこうなることが、こうすることが儀式にようにも思えたり、また違うところで、このキスにすがりたい気持ちもあった。

辰巳君を好きになりたいと思った。

辰巳君も、そうなんだろうと思えた。

あのさ。国山だけじゃなくて、俺も岩田さんのこと好きだったんだよね。でも、それって報われないじゃない。

冷たい麦茶の感触が頬から消えない時に、そんな告白をされたのがいけなかったのか。よかったのか。

そんな告白をしながらも辰巳君が「森谷さんもそうでしょ」と言ってきた冷静さに、救われるような思いがあつたのも事実。

そうなんです。

私も、弟が好きなんです。

義理とはいえ、血は繋がっていないとはいえ、彼は家族で。

私の中の何かが、やっぱりそういうことは受け入れられなくてだから。

辰巳君と、恋愛したいんです。

本当じゃなくても、構わない。

短くても構わない。

形だけでも、弟以外の男の人と、何かを共有したいんです。

辰巳君は「森谷さんもそうでしょ」としか言つてこなくて、頷く私にそれ以上は聞いてこなかった。

辰巳君が、私のそこまでの話を聞きたいと思っているのかもわからないし、私も辰巳君にそこまで話せるかはわからない。

「涙、出てる」

辰巳君が、そつとその雫を指に載せた。

辰巳君の指の上で、その雫がふにやと広がっていった。

「森谷さん」

辰巳君がさつきまでのキスとは違う空気で、私の体をふわりと抱きしめてきた。

「ありがとう」

辰巳君の言葉が、私の髪を優しく揺らした。

「こちらこそ」

私もそう言って、ゆっくりと両手を辰巳君の背中に回した。

嘘つきな私は、弟に気を持たせる返事をしたこの部屋で、違う人と始めようとしている。

ちゃりんと音を立てて、鍵が手の中から落ちていった。

その音は、私と辰巳君の時間が始まる、合図の様に聞こえた。

雨傘

「辰巳。私、全然信じてなんかないんだからね」

湿気を含んだ空気を身にまといながら、岩田^{いわた}綾女^{あやめ}は俺に会うなり睨んできた。

その頬に、二本ほどの髪を張り付けて。

俺は岩田から視線を外すと、彼女が持つ赤い雨傘をさつと取り、まだ留め具もされていないそれをくると閉じた。

「俺も、信じてなんかないよ」

そう言いながら傘を返すと、岩田は不機嫌な顔のままでそれを受け取った。

「熱い女岩田」の小さな頭からは、明らかに湯気が出ている。

「ところで、なんの話なわけ？」

そう水を向けると、岩田は今一度、頭を沸騰させたような表情になった。

「モリのこと。モリのこと、決まっているでしょ。辰巳はともかく、モリが辰巳を好きだなんて信じられないってこと」

ああその話、という顔をしたら、まるでその心内を見透かしたように、岩田がキツと睨んできた。

すっごいまっすぐな眼差し。

そういったところが、好きだと思う。

「ボクって、そんなに魅力のない奴かなあ」

「そーいうことじゃなくて」

「そう聞こえる」

「ばか。そんな意味で言ってるんじゃないって、分かっているくせに」

「どうかなあ、と考えるような素振りを見せると、「ああ、そうですか。私の表現力がまずくて失礼しましたねっ」と岩田がふくれた。

「まあ、まあ。ともかくさ、こんなところである話でもないでしょ」

思いっきり朝の通学電車の中なんですけど、と続ける。

「だって」

岩田は気まずそうな顔をしてぶいっと横を向くと、再び「だって」と言う。

「辰巳に会ったら言おうと思ってて、でも、他の人がいる時に言うのもなんだし」

岩田の言うところの「他の人」は、国山と森谷さんのことだ。

「他の人？　ここ、他の人だらけなんですけど」

そんな意味じゃないことは分かっているくせに、と岩田が切り返す。

そして、「ともかく」と言うと、岩田は意を決したように俺の顔を見上げて、「どっちかが無理をするような付き合いは止めて欲しいの」と続けた。

そんなことを言う岩田の顔を、輪郭を、前髪を、頬を、どうやっても自分のものにはならないその全てを、ぼんやりと眺めた。

岩田の傘は畳めても、頬に張り付いた二本の髪さえ俺には直すことはできない。

「辰巳もモリも私の大事な友達だから、傷ついて欲しくない。気まぐずくなりたくないの。みんなとずっと友達でいたい」

俺にとっては絶望的なその言葉を、岩田はまるでとても正しいことのように言い切った。

最初に岩田と仲良くなったのも、そして岩田を好きになったのも、

文句なしに国山だ。

国山が面白いように岩田を好きになっていく様を、俺は半分応援しつつどこかではかにするような気持ちで眺めていた。

受験真つただ中で、そんなことしちゃう国山をアホだと思つたし、国山がアホになる程岩田が可愛いなんてちつとも思えなかったから。

それこそむしろ、岩田と一緒にいる森谷さんの方がスタイルもいいし美人だしで、俺だけでなく彼女に注目している奴は多かったと思う。

だったらなんで、って話になるんだけど、人の気持ちの動きというのは不可解なもので、本人にだってその気持ちの出所は定かではないのだ。

気がついたら、好きだった。

ただ、それだけのこと。

あの日は雨だった。

うん、雨だった。

突然の雨に困っていた俺に、岩田が傘を貸してくれたのだ。

おお、ラッキー、サンキューなんて言いながら、俺は岩田の傘を差した。

そして傘を貸してくれた岩田は、でかいからとの理由で国山と同じ傘に入り、俺の隣を歩きだした。

同じ塾で同じ授業で、一緒に帰るのは日常の事だった。

岩田と国山が揃って歩くのも、いつものことだった。

岩田を傘に入れながら顔を赤くしている国山のことを、いつものようにからかう気持ちで眺めていた、はずだった。

しかし、一緒にの傘に入り歩く二人を見た俺の気持ちは、いつもとは違うものになっていた。

むかむかする、というか、いらいらする、というか。
全く、面白くなかったのだ。

いつからどんなことで、岩田に対してそんな想いを抱きだしたのか分からなかったけれど、ともかくあの雨の日には既にそうだった。

気持ちは、もうとっくに動いていた。

やんなった。

よりによつて、岩田かよつて。

「あ、モリだ」

改札付近で立ち止り、降る雨の様子を眺めていたであろう森谷さんが、岩田の声で振り向いたあと俺に気付き挨拶のように首を横に少しだけ傾げた。

そんな森谷さんの癖も、段々と俺の中で馴染みのものとなつてきている。

「おはよ」

森谷さんの少し低い声が、雑踏の中に紛れながら聞こえる。

「おはよう」

森谷さんにそう挨拶を返しながら、俺の中では「大丈夫だよ」という思いが湧きあがっていた。

大丈夫だよ。

森谷さんに対してなのか、それとも自分に対してなのか。
この状況に対してなのか。

改札を出る。

駅舎の軒下で、岩田と森谷さんが傘の留め具を外した。

二色の花が開く。

どんよりとした空の下に。

薄青い花と、無邪気な赤い花。

その二つがまるでおしゃべりをするかのような明るさで、俺の前でくると揺れた。

青い花を選んだのは、俺。

でも、心にはまだ赤い花がある。

じりじりと焦がすように、焦がれる様に、心で咲いている。

大丈夫だよ。

振り向く森谷さんの顔に、さっきの俺と同じものが見えた。

彼女の心にあるのは、どんな意味の「大丈夫」なのだろうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2008t/>

この恋の行方

2011年5月12日01時10分発行